

氏名	陳慶光
学位の種類	博士(観光学)
報告番号	甲第522号
学位授与年月日	2019年9月19日
学位授与の要件	学位規則(昭和28年4月1日文部省令第9号) 第4条第1項該当
学位論文題目	Value Cocreation in International Sports Tourism: A Qualitative Study of a Regional Revitalizing Marathon Event in Japan
審査委員	(主査) 佐藤 大祐 (立教大学大学院) 杜 国慶 (立教大学大学院) 舛谷 鋭 (立教大学大学院)

# I . 論文の内容の要旨

## (1) 論文の構成

### 1. Introduction

#### 1.1 Research background

#### 1.2 Literature review

##### 1.2.1 Sports tourism and its international aspects

##### 1.2.2 Value and value cocreation

##### 1.2.3 Applications of qualitative research methods

#### 1.3 Research objectives

#### 1.4 Research methods

##### 1.4.1 Research setting

##### 1.4.2 Data collection

##### 1.4.3 Data analysis

### 2. Value Cocreation from the Perspective of Event Organizers

#### 2.1 Developing value propositions

##### 2.1.1 Incorporate destination resources

##### 2.1.2 Incorporate social issues

##### 2.1.3 Incorporate international elements

#### 2.2 Communicating value propositions

##### 2.2.1 Communicate face-to-face

##### 2.2.2 Communicate through marketing channels

#### 2.3 Directing value cocreation

##### 2.3.1 Facilitate service encounters

##### 2.3.2 Incentivize active participation

#### 2.4 Facilitators and barriers

##### 2.4.1 Personal and organizational resources

##### 2.4.2 Social contexts

### 3. Value Cocreation from the Perspective of Event Stakeholders

#### 3.1 Enabling and enhancing value propositions

##### 3.1.1 Provide complementary expertise

##### 3.1.2 Invest additional resources

#### 3.2 Providing sports tourism elements

##### 3.2.1 Collaborate across organizational boundaries

- 3.2.2 Engage in intercultural communications
    - 3.2.3 Interpret the experience
  - 3.3 Facilitators and barriers
    - 3.3.1 Personal and organizational objectives
    - 3.3.2 Social contexts
- 4. Value Cocreation from the Perspective of International Participants
  - 4.1 Acquiring and propagating value propositions
    - 4.1.1 Search and receive information
    - 4.1.2 Process and share information
  - 4.2 Personalizing value propositions
    - 4.2.1 Participate in side events and activities
    - 4.2.2 Combine marathon running with traveling
    - 4.2.3 Engage in activities related to sports and running
    - 4.2.4 Train and prepare mentally and physically
  - 4.3 Consuming sports tourism elements
    - 4.3.1 Engage in intercultural communications
    - 4.3.2 Interpret the experience
  - 4.4 Sharing and reinterpreting sports tourism experience
    - 4.4.1 Share across time and space
    - 4.4.2 Reinterpret through sharing and recollecting
  - 4.5 Facilitators and barriers
    - 4.5.1 Personal objectives
    - 4.5.2 Social contexts
    - 4.5.3 Destination image
- 5. The Mechanism of Value Cocreation
  - 5.1 Value cocreation: a holistic view across actor roles
    - 5.1.1 Event organizers and event stakeholders
    - 5.1.2 Event organizers and international participants
    - 5.1.3 Event stakeholders and international participants
  - 5.2 Value cocreation: a three-phase process
    - 5.2.1 Cocreate value-in-expectation
    - 5.2.2 Cocreate value-in-experience
    - 5.2.3 Cocreate value-in-retrospect
- 6. Conclusion
  - 6.1 Toward a sustainable value cocreation cycle
  - 6.2 Implications and contributions

## 6.3 Limitations and future research directions

References

Appendix

### (2) 論文の内容要旨

スポーツの特長は単に実践することや観戦することに限らない。スポーツは場所に魅力的なイメージを付与することによって地域に多大な恩恵をもたらすことが知られている。本論文は地域活性化イベントとして特徴のある東北風土マラソンに注目し、その主催者とステークホルダー（スポンサー企業や住民ボランティアなど）、訪日参加者の大きく3つのアクターの視点から、各アクターの相互作用によって作り出される価値と、その価値共創メカニズムを解明したものである。

第1章では、まずスポーツツーリズムに関する先行研究の吟味から、外国人スポーツツーリストは動機と行動の点で独特の顧客層であり、価値共創の研究対象として最適であることを見出した。また、価値や価値付けに関する数多くの先行研究では、これまで価値の生まれたタイミングや相互作用に基づいていくつかの概念が提示されてきた。それらの中から本論文は、個人の考え方に加えて社会的背景やメディアなどによって影響される文脈価値と、商品・サービスの利用や観光行動などの経験から生まれる経験価値に注目し、文脈を考慮しながらスポーツツーリズムにおけるアクター間の相互作用を経験と捉えて価値を解釈することとした。

分析データは、大会の企画会議や海外PR活動、マラソン大会において、筆者が参与観察とインタビューを実施して収集した、日本語と中国語、英語のテキストデータである。このテキストデータに質的分析を加えた。具体的には、2章から4章でそれぞれのアクターが発したテキストを分析対象として、①テキストデータのコード化によるデータ分類と、②共通するコードのカテゴリー化による抽象化を繰り返すことで、データ全体の中での各コード・カテゴリーを最適化し、さらには③カテゴリー間の関連性の考察により、各アクター間の相互作用を解明した。また、他の研究者からコーディング結果のフィードバックを得て修正・補足など積み重ねて信頼性を確保した。

第2章では、主催者が発したテキストデータを分析することで、主催者側からみた価値共創を明らかにした。主催者は、東日本大震災からの復興や東北地方の特産品などからなる価値提案を企画すると共に、バーチャル空間でステークホルダーと訪日参加者に価値提案を伝達し、ステークホルダーと訪日参加者間の価値共創を円滑化させる演出やサポートも実施した。第3章と第4章では、それぞれステークホルダーと訪日参加者のテキストデータを分析した。ステークホルダーと訪日参加者はサービスの提供と消費という相互の接触を通して異文化交流に意味付けし、それぞれが異なる経験価値を持つものと解釈できた。

また、訪日参加者は大会参加前には東北という大きなスケールで被災地という漠然とした場所イメージを濃厚に所持していたが、大会中にステークホルダーとの食べ物や応援を介した相互作用によってこうしたイメージを払拭し、よりローカルな登米市の場所イメージを獲得したことが明らかとなった。

第5章では、前章までの分析結果を各アクターの役割と時間軸に注目して考察することで、価値共創のメカニズムを解明した。まず大会前には、主催者からのコミュニケーションを受けてバーチャル空間でステークホルダーと訪日参加者に「期待価値」が醸成された。次いで大会期間中には、ステークホルダーと訪日参加者は現実の時空間を共有して食べ物や応援を媒介に経験価値が共創された。そして大会後には、ステークホルダーと訪日参加者が継続的に相互作用しつつ、東北に関連する人や物事をトリガーとして当時の経験を思い出すことによって「振返り価値」が生じた。以上のように、3つのアクターの価値共創活動は、個人や組織、社会における文脈から影響を受けながら、各段階において「期待価値」、経験価値、「振返り価値」が共創された。さらに、ステークホルダーと訪日参加者が認識した価値が、満足度、想起性、イベントイメージ、場所イメージなどの形でイベントの持続性に寄与することが明らかとなった。

## Ⅱ．論文審査の結果の要旨

### (1) 論文の特徴

スポーツは場所に魅力的なイメージを与え、観光客や企業、住民を惹き付ける素材として地域に恩恵をもたらす可能性に満ちている。本論文は、地域活性化イベントとして特色のある東北風土マラソンについて、主催者とステークホルダー、訪日参加者の3種のアクターの視点から、各アクターの相互作用によって作り出される価値と、その価値共創メカニズムを解明したものである。まず、先行研究における価値の概念整理をもとに、本論文は社会背景やメディアなどに影響される文脈価値と、商品・サービスの利用や観光行動から生まれる経験価値に注目した。そして、文脈を考慮したアクター間の相互作用を経験と捉えて、価値を解釈した。分析データは、大会やその企画会議などでの参与観察とインタビューで収集した、日・中・英の3言語のテキストである。手法は質的分析であり、3種のアクターが発したテキストを各章に振り分けて、①テキストのコード化による分類と、②コードのカテゴリー化による抽象化を繰り返すことで、データ全体の中でのコードとカテゴリーを最適化し、さらに③カテゴリー間の関連性の考察により、アクター間の相互作用を解明した。また、2名の研究者からコーディング結果のフィードバックを得て修正を重ね、信頼性を確保した。分析の結果、主催者は震災復興や特産品などからなる価値提案を企画、伝達してステークホルダーと訪日参加者に「期待価値」を醸成し、両者による価値共創を円滑化させる演出やサポートも実施した。ステークホルダーと訪日参加者はサービスの提供と消費という相互の接触を通して、応援や食べ物を媒介とした異文化交流自体を意味付けし、それぞれが経験価値を持つものと解釈できた。この相互作用を通して、訪日参加者は被災地としての東北スケールでのイメージを払拭し、よりローカルな場所イメージを獲得した。大会後にもステークホルダーと訪日参加者は継続的に相互作用しつつ、東北に関連する人や物事をトリガーに当時の経験を想起することによって「振り返り価値」を生じさせたことが明らかとなった。

### (2) 論文の評価

従来の経営学やマーケティング分野の価値共創研究では、企業活動や医療現場での特定のアクターの視点から、企業対消費者、ホスト対ゲストという二元的な枠組みで能力やサポートなどの協働性の管理が研究されてきた。対して、本論文は3種のアクターによる価値共創モデルを考案した。その独創性は、先行研究で指摘された経験価値に加えて、「期待価値」と「振り返り価値」を見出した点、ステークホルダーと訪日参加者が認識した価値が

満足度や想起、場所イメージの形でイベントの持続性に寄与することを解明した点に収斂される。このように、価値そのものの可鍛性を多様な側面から解明した本研究は、観光研究にとっても貴重である。これは 3 言語の口述記録の質的分析によって初めて解明されたものであり、申請者の言語能力の高さと国際スポーツツーリズムへの着目により達成された。

審査会では、方法論の詳述、量的分析の可能性、多国籍コミュニケーションのさらなる取り込みなどについて今後の課題や研究の可能性が示されたが、これらは本論文の研究上の貢献を損なうものではなく、本論文の成果をより精緻化し発展させていく方向性をもつものと判断した。審査委員は、本申請論文の観光研究としての独自性と研究上の貢献を高く評価し、博士の学位に相当するとの見解で一致した。